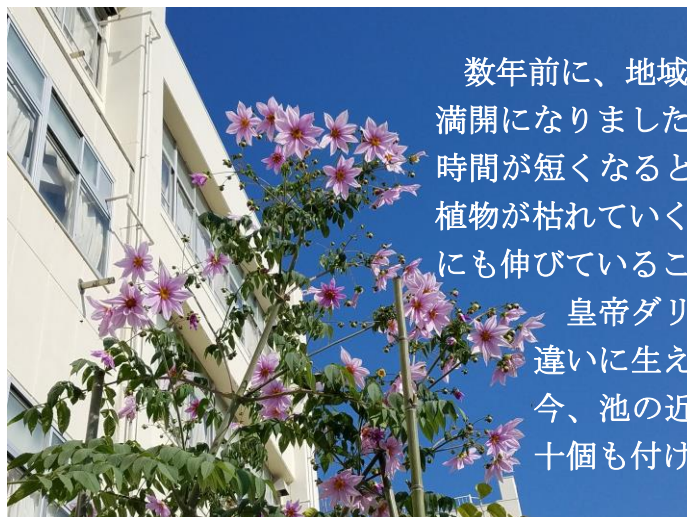


わたし なあんだ？

校長 榮 秀之



数年前に、地域の方からいただいた「皇帝ダリア」が満開になりました。皇帝ダリアは短日植物といって、日照時間が短くなると花を咲かせる性質があります。多くの植物が枯れていく時期に花が咲いたことと、丈が4m以上にも伸びていることから、ひと際目立っています。

皇帝ダリアは、竹のような節の茎を生やし、互い違いに生えた葉っぱと8枚の花びらをつけます。今、池の近くで茎の先端に淡いピンク色の花を何十個も付けて青空に映えています。

さて、この時期になると思い出すことが一つあります。大分寒くなってきた頃でした。朝いつものように校門で子どもたちを迎えていると、低学年の女の子が近づいてきて、とてもうれしそうな顔をして「わたし、なあんだ？」と聞いてきたのです。

子どもは、何かうれしいことや楽しみなことがあると、あいさつ代わりに「質問」をしてくる場合があります。どの場合も唐突なので、こちらも頭をフル回転させて質問の意図を推測し答えを探ります。

例えば、「今日は、何の日だ？」とくれば、その子にとって今日は特別な日であることは間違いないので、誕生日なのかな…とか、習い事の発表会なのかな…などと想像することができます。

例えば、「昨日、どこに行ったでしょう？」とくれば、家族と一緒にどこかに出かけて、とても楽しかったのだろうと推測できるので、思いつく場所を答えれば文脈から外れることはありません。

ところが、「わたし、なあんだ？」には、わたしの想像力が足りず答えを返してあげることができませんでした。「わたし、だーれだ？」なら名前を呼びます。「わたし、何をもっているでしょう？」なら握った手の中を想像できます。

「わたし、なあんだ？」「……………」「わたし、おねえさんになったの。」

赤ちゃんが産まれたことの喜び、そして自分がおねえさんになったことのうれしさや期待感が、一瞬にして伝わってきました。実に子どもらしい、子どもならではの、きらきらした表現でした。